

令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果 ー分析から見てきた成果・課題と今後の取組についてー

区 名	東成区
学 校 名	大阪市立片江小学校
学校長名	中谷 和博

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和7年4月17日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

(2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・大阪市立片江小学校では、第6学年 90名

令和7年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

令和7年度の学力調査は、国語、算数、理科について実施しました。
国語：正答率は大阪市、大阪府と同じで、対全国比は0.97となりました。
算数：正答率は大阪市、大阪府よりも高く、対全国比は1.02となりました。
理科：正答率は大阪市、大阪府と同じで、対全国比は0.96となりました。
児童質問調査、学校質問調査も実施し、家庭における学習やICT活用以外は、大阪市、大阪府と同じような傾向を示しています。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕

○学習指導要領の領域の分類では次のような結果となりました。
・知識及び技能の「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」「(2)情報の扱い方に関する事項」の正答率は、大阪市、大阪府よりも高くなりました。
・一方、思考力・判断力、表現力等の「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」の正答率は、大阪市、大阪府よりも低くなりました。

○問題別集計結果から次のような結果となりました。
・大問1(一)、話し合いにおいて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係したりして伝え合う内容を検討することや、情報と情報との関係づけの仕方を理解することなどについては、大阪市、大阪府よりも高い正答率になりました。
・大問2(二)、図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することについては、大阪市、大阪府よりも高い正答率になりました。
・漢字を使って書き表す問題の正答率は、大阪市、大阪府よりも高くなりました。
・大問1(三)、インタビューに関する問題では、自分が聞こうとする意図に応じて話の内容を捉えることや、話し手の考えと比較しながら自分の考えをまとめることについて、大阪市、大阪府よりも低い正答率になりました。
・大問2(一)(三)チラシに関する問題で、書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考える、また、書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えるという問題の正答率は大阪市、大阪府よりも低くなりました。

○これらの結果から、国語の学習においては、基礎基本的な語句の学習や答えを見つけることだけにとどまらず内容を深く捉えて、それに対する自己の考えをまとめること、その際、文章の構成を考えて書き表し方を工夫することなどが大切であると考えます。

〔算数〕

○学習指導要領の領域の分類では次のような結果となりました。
・「A 数と計算」「C 変化と関係」「D データの活用」の正答率は、大阪市、大阪府よりも高くなりました。
・「B 図形」「C 測定」の正答率は大阪市、大阪府よりも低くなりました。

○評価の観点では、「思考・判断・表現」の正答率は大阪市、大阪府、全国平均よりも高くなりました。

○問題別集計結果から次のような結果となりました。

- ・「A 数と計算」領域の3(1)(2)(4)の正答率は、大阪市、大阪府、全国平均よりも高くなりました。しかし、3(3)の数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えるという問題の正答率は、大阪市、大阪府、全国平均よりもかなり低くなりました。
- ・2(1)平行四辺形の性質を基に、コンパスを用いて平行四辺形を作図することができるかという問題や、2(3)角の大きさについての問題の正答率は、大阪市、大阪府、全国平均よりも低くなりました。

○これらのことから算数科の学習では、特に図形の求積や数量の変わり方について、答えを求めるための過程を大切にし、自らがたてた考え方を他者に伝えたり、他者の考え方を聞いたりしながら、思考力・判断力、表現力を高めていくように取り組んでいきます。

[理科]

○学習指導要領の領域の分類と評価の観点では次のような結果となりました。

- ・A区分の「エネルギー」を柱とする領域やB区分の「地球」を柱とする領域については正答率が大阪市、大阪府よりも高くなりました。
- ・B区分の「生命」を柱とする領域については、正答率が大阪市、大阪府よりも低くなりました。
- ・評価の観点では、「知識・技能」の正答率は、大阪市、大阪府よりも高くなりましたが、「思考・判断・表現」については正答率は、大阪市、大阪府よりも低くなりました。

○問題別集計結果から次のような結果となりました。

- ・エネルギーを柱とする領域の、2(1)金属に関する問題、2(2)電気の回路に関する問題、2(3)電磁石に関する問題の正答率は、大阪市、大阪府よりも低くなりましたが、一方で、2(4)乾電池のつなぎ方に関する問題の正答率が、大阪市、大阪府よりもかなり高くなったため、結果的に「エネルギー」を柱とする領域の正答率が高くなりました。
- ・3(2)顕微鏡の捜査に関する問題の正答率は、大阪市、大阪府よりも低くなりました。
- ・3(4)レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし、表現することができるかどうかを記述式で答える問題の回答率は、大阪市、大阪府よりも低くなりました。

○これらの結果から、理科の学習においては方法や留意点を深く自分で認識し、予想や振り返りを十分に行いながら実験や観察に取り組んでいくことが重要であると考えます。

本校の結果が大阪市、大阪府、全国平均とは異なっているものは、次の通りです。

(5)「自分には、よいところがあると思いますか」について、肯定的な回答は全国平均と同じ程度であるが、強い肯定は大阪市、大阪府、全国平均よりも10ポイント以上高くなり、自己肯定感が高いことがわかりました。

(6)「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」について、強い肯定は大阪市、大阪府、全国平均よりも10ポイント以上高く、肯定的な回答は約98%ありました。また、

(38)「先生は、授業やテストで間違えたところ、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」について、「そう思う」と強く肯定した児童が64.3%になり、全国平均よりも15ポイント以上高い結果となり、さらに肯定的な回答は95%を超えました。このことから、本校の教員が子ども一人一人に丁寧に対応しているようすがうかがわれます。

(11)「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」については、強い肯定の回答が大阪市、大阪府、全国平均よりも10ポイント程度高くなりました。

(12)「学校に行くのは楽しいと思いますか」について、強い肯定は大阪市、大阪府、全国平均よりも10ポイント以上高くなりました。

(14)「友達関係に満足していますか」について、強い肯定は大阪市、大阪府、全国平均よりも10ポイント以上高くなり、肯定的回答は96%を超えました。

(17)(18)(19)から、本校の児童が平日及び休日に家庭で学習している時間は、大阪市、大阪府、全国平均よりもやや短いということがわかりました。

(28)「5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT授業を、どの程度使用しましたか」から、大阪市、大阪府、全国平均と比べて使用時間が短いことがわかりました。また、(30)1～7の結果から、5年生までの学習の中で、ICT活用について自信をもつことができていない児童が多いことがわかりました。

(29)1～4の結果から、PC・タブレットを使って、文章を作成する、情報を整理する、学校のプレゼンテーションを作成することなどはあまり得意ではないと感じています。

今後の取組(アクションプラン)

本校では、令和6年度、7年度の2年間、「主体的に伝え合い、共に学び合う児童の育成 ―学び合う楽しさ、わかる喜びのある授業を目指して―」を主題として算数科の実践研究に取り組み、教員一人一人が算数科の授業改革に取り組んでいます。この結果、算数科では児童の「思考力・判断力、表現力」が高まるような授業づくりが行われ、その成果が表れてきていると考えられます。

一方で、国語科や理科については、算数科で行われている「主体的、対話的で深い学び」につながる授業づくりの過程の途上であり、現段階ではその成果は十分に表れていないものと考えます。今後、算数科で行ってきた、児童の「思考力・判断力、表現力」が高まるような授業づくりをより一層推進していきます。

ところで、多くの学校で、初等教育の基礎となる低学年において、さまざまな理から、一斉指導を基本とした学習活動に向かうことが困難である児童が年々増加しています。本校においてもその傾向はあり、今後、すべての学年、教科において、個ます。そのためにも各教科の学習活動において、ICTを活用して、情報を取捨選択していくこと、写真や図、グラフなどを用いて情報を整理していくこと、情報をもとに自己の考えを構築し表現しながら周囲と共有していくことなどを行っていきたいと思います。

現在、本校では大阪市教育委員会の支援を受けながら、「エビデンスベースに基づく学校改革」として、校内全体でPBS(Positive Behavior Support ポジティブ行動支援)、不登校対策(総合教育センター研究Ⅳ実践校)に取り組んでいます。

また今年度より、主幹学校司書が週4日本校で勤務することとなり、学校図書館の読書環境整備やSSR(スクール・サポート・ルーム)の整備を行っています。

今後も、教職員や友達との良好な関係づくりも行いながら、より多くの子どもたちが「行ってみたい」「学びたい」と思える学校を作っていきたいと思っています。
